

川柳句集

肉

眼

橘  
高  
薰  
風

川柳塔社刊



著 者

原田神社にて

# 目次

序文……………中島生々庵

作品……………一—五〇

索引……………一—九

あとがき……………橘高薫風

題 簽  
藤 沢 桓 夫

## 序 文

こんど本社編集長、橘高薫風君が、句集「肉眼」を出すことになった。同君にとって第三番目の句集である。第一句集に「有情」第二句集に「檸檬」がある。

その「檸檬」は、刊行が僅かに旬日程遅れたばかりで、路郎先生のご臨終に間に合わず、親しく先生のお手にして頂けなかつたと言う、悲しい思い出の句集である。この「檸檬」につづく第三句集が、こんどの「肉眼」であるわけであるが今となつては、この「檸檬」の誕生こそは、路郎先生にとって、最後の愛弟子の句集となつたのである。苦しい病牀にあって筆を執り、愛する末っ子への贈りものとして尊い序を賜つた。「視野無限、この言葉に尽く」というのである。薫風君にとつてかしこしとも、有難いとも、涙は枯れはて、胸は焦がされてしまった思いであつたらう。感激とも、鳴謝とも、そんな文字が、なんと白々しく、なんと生ぬるく、どうにかして、生地のままの自分の思いを表現し得る文字や言葉は

ないものだろうか、こうした彼の苦悩は、到底、他人の伺い知ることを許さぬものがあつたらう。辛うじて、「檸檬」新刊第一号を、ご霊前に捧げつつ、「賜つた序の教えを、護り本尊に、精進を続けます」と誓いの数語を綴り得たのであつた。それから八年の歳月が過ぎた。この固い誓いに裏付けされたように、薫風君の成長ぶりは、全国の柳界をして目をみはらせる今日になった。同時にこの八年間は彼にとって極めて苦しい八年間でもあつた。そうした歳月に耐えてゆく強靱な性根が、彼の肉体のどこにひそんで居るだろうか。恐らくは、「視野無限」のお言葉によつて、すべてが支えられて居るとしか思えない。その凝集の一片が「肉眼」となつて生れたのである。

第一句集「有情」が生れたのは、「檸檬」より丁度三年前のことで、その時彼は「これは僕の一里塚に過ぎない。一步一步蝸牛の歩みを続けてゆくであらう」と勇しく出発した。その当時の路郎先生は大変お元気で選句や装幀等すべて先生の手を煩わし、題字の「有情」は私達にも懐しい先生のご親筆として朱色に燃えて居る。その「有情」の序文に、「新進作家として推奨に価するレベルの高い句

集であることは自負していいし、前途に多くの期待を懸けることの出来る作家である」と評された路郎先生のご達見に今更驚くのである。

こんどの「肉眼」は、四百五十句を収める予定のようで、先日、句稿にざっと目を通す機会を得て感じた事は、この「肉眼」をとおして、彼が愛好してやまぬ紫の椅子にゆったり腰を落して、煙草をくゆらしながら、悠々迫まらない自信にみちた姿は、「有情」から「檸檬」、「檸檬」から「肉眼」と大寫しになって私にせまって来る。さぞかし、全国柳壇は新しい驚きと快哉とをもって「肉眼」を迎えてくれる事であらう。

昭和四十八年六月十一日

於 川柳塔社

中 島 生 々 庵

恩師の死　その夜眠むしとも眠むし

恩師の死　手に止まる蚊をただ見つめ

恩師の死　蟬殻の背は断ち割られ

柳も雲も後姿に 恩師の死

恩師の死 油然と聞く浪花節

老詩人 ひとり渉らす天の川

褒められた思い出がなし師を葬送る

炎天に寒疣立てて師を葬送る

初盆の胡瓜の馬は師に似たり

涸はるか 近づきしだけ遠のく師

梢あり わが生く限り中天に

氷柱に侍す 正装のバーテンダー

大嘘について大きな笑い声

屈辱の紋章 女史に坐りだこ

ルンペンに王侯の鬚 詩人の眼

影にまた影の生まれる走馬灯

猫憎くし 女中の仕打ち告げにゆく

全き死 鳥とキリスト首垂るる

嫣然と舞妓酔うても襟かたし

運動会 華やかな雲空に浮き

コスモスのほったらかしの美しさ

ボーリング 恋のライバル麩

悼 高須陞三味氏

叔父さん そう呼びたかったあなただったが

魚釣るべからず 晩秋から初冬

断崖絶壁 断崖絶壁 冬の恋

滝冰る 信ずべからぬささめごと

長靴の片方どうしてもこける

歩き初めの子を元旦の地へおろす

元旦や 齒の美しいお嬢さん

福寿草 父子兄弟に似たりけり

弱きわればかり出てくる 夢の中

一人去り一人去る 聖堂にして

子の頭蜷のごとし 可愛ゆし 黒し

われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳

鼻先をつんつん歩く好きな人

富士見えていよいよ華麗 食堂車

草の芽が出たぞ　おしっこさせながら

子を抱けば必ず花と向い合い

大國主命の國の春の雲

嘘をつく人間ばかり　しゃれこうべ

子と握手　今日は春立つ日なりけり

消防車　火よりも赤く胴ぶるい

犬吠崎 二句

波のしぶき逃れて小雨降っている

灯台は灯の入る瞬時羞らいぬ

おしゃれな子のてるてる坊主までおしゃれ

水郷 五句

水郷の微風から雨に移る候

水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし

柳 ポプラ 柳 ポプラ 水郷よ

水郷の胸の高さに続く水

音のみの世界またよし 水の上

山川阿茶さんへ

古稀清しや 一輪挿しのたたずまい

緑衣脱ぎ捨ててもみどりなるは女

天国に節穴一つ 豆秋忌

蚊帳の隅は故郷よりも晦く遠し

路郎忌に炸裂したるカンナの朱

蓮の花は一茎一花 恩師の忌

路郎忌や むかし僧俊寛の霊

路郎忌のビールのはあふれしめ

路郎忌に言葉を飾る人ばかり

鐘の音　さらに身のおきどころなし

盲滅法馳け出だしたき 恩師の忌

恩師の忌 血脈豊かなる蓮花

かんと鳴るものあるなり 恩師の忌

新涼へ 馬の耳ほど聡からず

いぎたなき寝相の昼寝目覚めよし

石の階 童話を讀むにうってつけ

秋風の天神さまの細道じゃ

横向きの女ばかりへ秋の風

金ペンにふさわしき秋灯となる

絲瓜のあおほどの青なし 祖父の愛

栄光のマントの裏は血の色だ

兎の目ほどのしずかな恋どころ

曼珠沙華 匂いは知らず別れたり

世の中に鞭ほどの線なかりけり

学問の跡形もなし 小商人

嘸三味氏三周忌

人情の 秋深まればよみがえり

川上三太郎先生へ

紫綬やよし 詩人の胸をいろどるに

明治百年 蹄の音は消え去りぬ

赤帽もそのうちみんな齡をとり

十二月 あしかの声につまさるる

中之島劍先は寂 十二月

元日の恋に使いし一時間

オーバーの襟立てさらに破魔矢立て

何もかもぬかるむ戦後 明治村

ベトナムや 都会の鳩は鉄のいろ

ベトナム遠し 子のピストルに斃れる真似

建国祭 寒の卵に血がまじり

わが齟齬に裏磐梯は似たりけり

飯盛山 遺恨の如く雪残る

一人旅 わかさぎ釣りの氷穴親し

黝々と水かけ不動 恋の垢

処女の死 鏡の中へ歩み去る

おたまじゃくしのままでありたし少女の恋

人を待つ　かたわらの花嗅ぎもして

旅に出て帰り来るまで麦の秋

一日の重さ軽さよ　日記帖

風薫る キューピーほどの裸はなし

風薫る 歩きながらのハーモニカ

歌うより踊るよりない平和かね

テレビ見る 子を頤と膝に埋め

金環蝕 そらエンゲージリングだよ

舟歌は最も人を恋う歌か

捨猫とうなだれがちの向日葵と

童顔は首から上だけのことさ

同期の桜 酒に爛れてしまいけり

四五人が来て瞬時句碑華やげり

句碑ありぬ 亡き先生の背丈程の

悼 水谷鮎美氏

風のない浄土へ帰る心の灯

夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん

臘燭の数 来し方の女人像

受験子に昼夜階なす時間表

乗鞍 二句

母と来てお伽話の花の色

雲海に槍 胸中に人尖る

噴水の形変らず恋終る

明治村 醉生夢死の昼の月

明治村 烈婦というはすでになし

犬と住む都会の底の夜の底

信濃の旅 五句

霧のダム 紺の背広の竜神か

黄色い屋根の旅館に寝たり 秋の信濃の

幻の女の息の霧の音

霧の奥 熱が出そうな林檎の実

火口湖から わが眼鏡から 霧生まる

お隣りと壁一枚の夜が長し

初冬の恋　鶴の面着て立ち向かう

十年経て女の言葉あわれなり

スケートの余裕は枯葦を啣え

汝が祈りふかからしむと雪を給う

天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く

今日も最後に見た壁のマリヤさんの目

お元日 わが家の波夷羅大将も

元日の冬濤を率て逢いにくる

初夢も汚れるばかり 中年は

青年の歌なまぬるきお元日

お年玉 不兌換紙幣ばかりなり

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

白毫寺境内 華美な乳母車

一枚めぐり一枚めぐり 波と恋

安西峰代さん結婚

およめさん金米糖を食べ 愛に満ち満ちてありぬ

石くれも三つ積んだら思惟の塔

攻める扉逃げる扉を持つあいつ

別れの日 真珠一粒嚙みこんで

友来たる 古きレコード回すべし

山男 山を下りてはみすぼらし

白い孤独に耐えた烏賊の目の黒

牡蠣殻におのずからなる波の縞

中年の私語 枯葦の金の前

南天の朱実と隣り合わせた死

冬の雷 石仏七千俯瞰の中

人生の果ての祇王寺桜 真冬

乳母車 いのち育てしものなつかし

土の中 土の埴輪が埋められ

墓があり 急に土あたたかくなる

滝の白 雨は斜めに降りかわり

春日大社万灯笼 三句

灯笼三千 祈願三千 尽くや神

静かな灯三千集ってしずかなり

大いなる硝子の如き寒気あり

お水取り 二句

火の粉降る闇 豊頬の奈良乙女

走る火の行きつくところ屋根の反り

恋を待つ人座り椅子充実す

雪国の路にひ弱な都会の靴

真心をあげて淋しくなりました

待つ人が来て愛犬を放ちやる

税務署出て万の毛穴を押しひろげ

赤い鉤 赤い糸もて人魚は釣られ

春愁の 無より淋しき無限大

笛吹き童子 恋ならなくに ならなくに

仏像を恋うるがごとき恋となり

ホームバー 子なき夫婦が赤を着て

秋吉台 石の饒舌 雲の黙

朱の鳥居 愛恋道の入口か

寂まくと 伎芸天女に指紋なし

尾道にて 五句

師はあらず 文学小径埒もなや

尾道や 今見下ろせし船に乗る

五月の雨 尾道生駒似たるあり

師を胸に置く 船と船すれ違い

盲目の亜鈍氏が笑む 師を話し

四十過ぎ 闇の深さが見え初めて

鯛網の威勢も劣る鯛の鱗

鯛網の冷めたき鯛と思われず

香水を変えぬ 女の絆に似て

耕耘機 色異なれど音同じ

石仏を三たびめぐれば縁し生る

掃苔の隣の墓に帽をのせ

能登から佐渡へ 九句

てんと虫 ここにも小さい輪島塗

銭湯に隣りす 輪島映画館

鬼あざみ 能登曇りてふ曇りあり

さい果ての旅に見し滝 海へ落つ

灯台と神の塗らせし花との白

海渡る たかが佐渡とは云う勿れ

花の墓 大佐渡小佐渡並走す

忘恩や 磯の香のせぬ日本海

男あり すっぱり痩せておけさ節

佐渡を去る

青佐渡を墓と思いしは只今なり

暮れ切らぬ花火 心があとさきで

虹の輪に孔雀も負けん気を起こし

夜の波にふたりの心縫わせおり

霧の夜の松の林に死後の景

彼岸会の無音無明は亀にあり

睡蓮に汗くさき身を遠ざける

漆黒のピアノから出る海の音

晩涼の木に吊るされし歌謡曲

猫抱いてあれば乙女子耳聴く

秋風に傷なきものはなかりけり

眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり

一人旅 切符切らるる音もよし

悼 河相すゝむ氏

面影の中折帽と旅靴

草臥れがどっと仁王の大わらじ

スケートを履くと獣の姿勢とる

嗚呼 清原祐志君 五句

枢出た跡形もなし 療養所

耳濡らす涙 生涯仰臥の身

菊の精を見き 童貞を見き 君に

君の骨 栗拾うごと拾われよ

骸と同じ形でこの夜寝る

淀川の水滔々とお元日

冬夜の凍て 愛恋の書も真理の書も

雪見えて特急列車熱帯びる

牡丹雪 ゆっくり俺が昇天す

白黒記

読みつげば 冬の未明の白湯の味

悼 工藤安亭氏

君あらず 浅虫の日は見えながら

桂浜  
海の風 竜馬の鬢へ  
ふところへ

足摺岬

紅椿墜とすや怒濤はばたけり

讃岐富士 一番星を簪に

盲人の手をひく先を道おしえ

夕桜 盲人鳩の餌をこぼす

夕桜 琴朱の布に包まれる

吐く息も吸う息もなし 夕桜

夕桜 人の情は大切な

恋の句を刻まれし碑の濃陽炎

旅先の動物園のフラミンゴ

潮干狩 竿突っ立てて帽子掛

猫柳 亡き人ばかり思わるる

鳥取砂丘 四句

四つ足を連れた足跡 大砂丘

子と来れば砂丘隅まで砂の山

三人の子と玄奘のごと行く砂丘

風紋に 電気に似たるもの走る

夕桜 恋の正体判らねど

夕桜 光も影も吸い尽くし

六帖の浄土となって眠りこけ

逢いに行く心の中の首飾り

額の裸婦と同じポーズで夢を見ている

物言わぬ金魚がうれし 誕生日

金魚すくいの網のごとしか 敗北は

傷ついた父 その日から髭をおく

原爆忌 鳩ら火傷の脚運ぶ

広 島

ここに来て胎児のごとき祈りあり

残暑御見舞 鞭打ち症も三月目で

逢いに来た 魚族のように身をしまらせ

恋人の芥子の涙でもいいさ

ひと一人心に見えて秋の風

河相すゝむ氏一年祭

虫が鳴く 一直線に亡き人へ

曼珠沙華 恋わるるよりも恋うべしと

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

一方になびけば恋慕薄とぞ

榛名湖

榛名富士 四季の手鏡秋は藍

望郷よ 地図の上では三輝

菊花展 天守へやさし菊の塀

菊の呼吸 処女懐胎もありぬべし

菊の壺 薔薇の壺より物思う

青年長髪　ピストル型はドライヤー

老猿の半跏思惟像すぐ崩れ

陸橋は天下の嶮よ　梯子酒

妻病む 十句

点滴の血のみ暖色 手術室

手術なお神の議りに似し医師ら

手術なお交響楽が鳴りつづけ

紅薔薇は壺に剩れど血の足らぬ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

病院の丑満刻を尿捨てに

お見舞の三品四品は小包で

縫針を折ってしまえり男親

クリスマス 祈れるものは祈りおり

病院の金魚寡多なく退院す

消防車 前方睨む人ばかり

釣針を整う如し 旅前夜

元旦や 偈頌のごとくに師の一句

読み初めの今年は石田波郷集

夜の長さ 襖をあける猫がいて

妻再び入院す 四句

妻に病まれ 壺中をのぞく 日に幾度

病妻は少女のようなくくり髪

袋ごと蜜柑食う子よ 母が病み

手にのせた文鳥の暖　母が病む

牡丹雪　聴覚視覚より敏に

恋の景　丸木橋から鉄橋へ

悼 後藤梅志氏 二句

正しき死 その夜莊嚴 山焼かれ

横縞の雪となりたり 霊柩車

一隅と云うは安けし猫などいて

噴水と相似の緑 柳なり

雪国の桜でありし桜漬け

万博ソ連館

チエホフの卵を生みそるな眼鏡

竜飛岬 二句

句碑激し 浪ここに果て風ここよりす

竜飛岬 地に這う蟻も疾風の圏

藤巻昌子さんへ

婚を約し 月へ帰れぬかぐや姫

光堂 大阪地獄から来しに

光堂 胸三寸に収まれり

梅雨荒し 許せぬものある如く

焼ける胃と如何なし難し 想夫恋

ワンマンも胃のたかぶりを持って余す

枕抱いて 胃をかばえるか虫を聞くか

斜に見て天のひとでの大文字

大文字 額の焼ける火なりけり

遠き火の小さく濃ゆし大文字

大文字 酔醒めるよりはかなしや

大文字 夢の多くは夢で終る

松島のふた月たちてなつかしや

入院手術 十句

入院や わが来し方の土埃

天井が未来へ移行 担送車

麻酔より醒めて必ず夜なりけり

鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

粥を嚙む 乳児嚙むよりおそれをなし

秋の雨 しずかに粥がこなれゆく

手術後の白髪いつまで抜かざるや

胃を切除りし秋 犬抱けばあたたかに

焼跡に似た傷抱いて冬近し

胃半分 肺半分の湯呑かな

額縁を出て薔薇捨てし夫人像

朝顔にロマン生まれるべくもなし

嗚呼 清水白柳氏 四句

大輪のぐわらりと菊の散りざまや

悲報来 金魚 鮒 鯉 水の底

病床に聞く計へ水を飲んですます

菊の香よ 親切心は引継がん

ジンフィーズ 美人は美德だと思ふ

なお会わず 冬木は黒い血管図

霜月悲唱 五句

ハラキリ由紀夫へ 雪降らず 花散らず

死に行く鉢巻の尾を長垂らし

由紀夫の首といくばく距つ焼林檎

まどうなく胃を切除りわれのながらうに

終焉や 裂けてくれない増す柘榴

毛皮着て女にめぐる獣の血

風花す 雪子が髪を梳くらしく

長男の頭へ手を載せやすき背丈

人を待つ茶房の壁の古城の絵

悼 住田乱耽氏

晩年という日のなかりける男

水仙にはあたたかすぎる風邪の部屋

便り来て咳こぼれたり うれしい咳

長尾鶏 李白は如何に叙すならん

通り抜け 花の濃淡夜に入りぬ

陰陽石 つつじの燃える頃となる

中尾藻介兄へ

男へもやさしい手紙書く男

父の愛娘にあつし 富士桜

切手にも金魚が泳ぎ風薫る

梅雨明けの雷どんと 路郎の忌

路郎の忌 白の鉄線一花でよし

路郎の忌 形見の肉池藍あせず

路郎の忌 立膝癖も師父ゆずり

路郎の忌 句を奉り香華とす

路郎忌に 松の洩れ日のなつかしさ

路郎忌に塔の影なす酒の壘

路郎の忌 天牛に来て落着きぬ

路郎の忌 睡蓮水の旅つづけ

戦傷の盲人堀江正朗氏はかつて路郎忌句会に  
上阪を欠かせしことなければ

その人を待つ 路郎忌も七回忌

胃を切除って夏冬ながし 誕生日

活け花の師匠にもある邪推かな

馬籠・妻籠にて 三句

お六櫛 われを籠らすひともなし

櫛の齒に秋の近づきいたりけり

雨上り 猫はや歩く石疊

雲 波に 波 雲に似し はたちの日

ベトナムの難民に似た瘦昼寝

生き死には碁石のことでないのなり

一日は鎖一環 倦怠期

中年や 初秋に多き赤い花

默契や 野に紫の花が増え

裏窓は山下清画く屋根だ

革命へ 音沙汰なきも志

木犀と星が漉すなるこの夜気か

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

吉村和美さんへ

葛の花咲き 樹下美人嫁ぎしと

滝又水 海を渡って来たわれに

憂国忌 柿は蒂のみ残りたり

半月のごろんとありぬ 憂国忌

四つ足で歩けば楽になる傷か

切株の俺の五年と子の五年

冬の酒 蛸の足こそ親しけれ

白蝶入り 黄蝶出て来ぬ 寺の門

夫婦にはなれなかったが冬の旅

枯枝に鳥 幾世の友情か

革命をめぐらすに 湯に身が浮くよ

お元日 日本人の目の黒さ

誕生の馬の額の白い星

紅椿 雪を解かしていたりけり

黒い炎は人妻の掌の黒茶碗

志操とや 嘴にある鼻の穴

手に足に関節のある寒さかな

ひとりよりふたりにこわき屏風波

黙契や いまも仏法僧がなく

ギター抱き ぼろんぼろんとこぼす悍

吊皮は手枷 生涯平社員

受験子のすでに闘う白い息

冬牡丹 九死一生かも知れず

一日に精魂尽くす瘦せようだ

夜桜へ 街の時計は刻打たず

反葬は雪の巔から李花の里

琴古く曲新しく  
いのちの譜

水浴びの鳥を見ている人妻か

少年の幾人いても毬一つ

路郎の忌 曠恚近づき遠ざかる

路郎の忌 酒債なければ詩債なし

七月の蜂起の空となりけり

恋人がいま肉眼に入り来る

逸見灯竿氏を祝し

灯竿と号し その灯が古稀になり

板尾岳人兄へ

山男 山の画集に汗おとす

浄瑠璃寺 四句

見残した夢を見ている塔の朱よ

塔の朱の水に映れば浄土の朱

立たせたき人 睡蓮と塔の間

残酷な声　睡蓮の眠れるに

灯台よ　牛乳壘に乳充てる

人妻よ　海中の石見えながら

大文字 恋のはじめのごとく点く

大文字 はや消えかかる第二割

大文字 聞えぬ音と見えぬ影

堀江正朗氏還暦

心眼に六十一の秋が澄み

山路星文洞氏へ

めでたさは作句還暦 喜寿の翁

雨の作州大原で

武蔵少年が見ていた雨垂れか

腸詰が繋がっている母子家庭

秋の恋 受話器の奥で時計鳴る

中年や 癲癇病みを絶えて見ず

サボテンも蟻も乾けり 恍惚の人

水飲めば涙に変わる 恍惚の人

一生に一度の御籤 父のみくじ

当選をしたら鯨を裏返えし

旅館廃業

人生に起承転結ありにけり

父の忌に障子の部屋もなくなりぬ

昭和乱世　今太閤は瘦せていず

愛人を帰して鬪志一転す

寡婦の買う数珠のようなる首飾り

元旦ぞ ルバング島も元旦ぞ

娘のボーイフレンドやよし お元日

ルバングの一兵の生 宮中歌会

父の乗る船の模型が応接間

裏梅は聞えぬふりをする女

金剛山

霧這えば杉の樹間の正しさよ

深眠り 母娘相似のカメオ置き

哀歎の底に穴ある植木鉢

弥次郎兵衛 一人一点 殉死かな

裏切られあたたかきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

男ばかり澄む 橋立は松の木ばかり

童貞さんふうわりと跳ぶ 春の泥

昼顔へとどきたけれど波の舌

地下鉄に勤持つなりメーデー歌

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

尼緑之助氏句碑

この句碑の はじめて会うてなつかしさ

赤鼻の躰佳境に入りたり

呼び戻す 背なの赤子の名を呼んで

白昼夢 灰皿はわがコロシアム

核のごと艱難の歯がこぼれたり

安からめ 御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し 女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

川柳句集「肉 眼」索引

朝顔に	秋吉台	秋の恋	秋の雨	秋風の	秋風に	秋が来て	赤帽も	赤鼻の	赤い鉤	青佐渡を	逢いに行く	逢いに来た	愛人を	哀歎の
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一〇五	五七	一三八	一〇三	二二	六八	一二二	二七	一四七	五五	六五	八〇	八三	一四一	一四四
一隅と	一生に	石の階	石くれも	いぎたなき	活け花の	生き死には	呼吸つめて	飯盛山	胃半分	胃を切除りし	胃を切除って	胃	歩き初めの	足摺の
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
九五	一三九	二二	四七	二二	一一七	一一九	八九	三〇	一〇五	一〇四	一一七	一〇	一一八	一四九
裏窓は	裏切られ	裏梅は	海渡る	海の風	乳母車	歌うより	嘘をつく	兎の目	陰陽石	一枚めぐり	犬と住む	一日は	一日に	一日の
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一一一	一四五	一四三	六三	七四	五〇	三三	一四	二四	一一二	四六	三九	一一〇	一三〇	三二

雲海に	三	お隣りと	四	額縁を	一〇五
運動会	七	音のみの	一七	学問の	二五
え		処女の死	三一	影にまた	六
嫣然と	七	長尾鶏	一一二	火口湖から	四一
栄光の	二四	鬼あざみ	六二	風薫るキューピー	三三
炎天に	三	尾道や	五八	風薫る歩き	三三
お		お見舞の	九〇	風のない	三六
大いなる	五二	面影の	六九	風花す	一一〇
大嘘を	五	およめさん	四六	鐘の音	二〇
大國主命	一三	お六櫛	一一八	寡婦の買う	一四一
オーバーの	二八	恩師の忌	二一	粥を噛む	一〇三
お元日 日本人	一二六	恩師の死	一	蚊帳の隅は	一八
お元日 わが家	四四	恩師の死	一	枯枝に	一二五
おしやれな子	一五	恩師の死	一	蝨計を	一四五
叔父さん	八	恩師の死	二	元日の恋	二八
おたまじゃくし	三一	油然		元日の冬涛	四四
男あり	六四	か		元旦ぞ	一四二
お年玉	四五	牡蛎殻に	四九	かんと鳴る	二一
男ばかり	四五	革命を	一二五	元旦や偈頌	九二
男へも	一三	革命へ	一二一	元旦や歯の	一〇
	一一三	額の裸婦	八〇		





水郷の鯉のぼり	す	一六	鯛網の威勢	た	六〇	便り来て	一一一
水郷の微風	一六	鯛網の冷めたき	六〇	誕生の	一一六	断崖絶壁	九
水郷の胸の	一七	大輪の	一〇六	ち	九		
水仙には	一一一	大文字酔醒める	一〇一	チエホフの	九六		
睡蓮に	六七	大文字類の	一〇〇	地下鉄に	一四六		
睡蓮は	一五〇	大文字夢の	一〇一	父の愛	一一三		
スケートの	四二	大文字恋の	一三六	父の忌に	一四〇		
スケートを	七〇	大文字はや	一三六	父の乗る	一四三		
捨猫と	三五	大文字聞えぬ	一三六	中年の	四九		
せ		滝氷る	九	中年や癩癩	一三八		
青年長髪	八七	滝の白	五一	中年や初秋	一二〇		
青年の	四五	滝又水	一二二	腸詰が	一三八		
税務署出て	五五	武蔵少年	一三七	長男の	一一〇		
攻める扉	四七	正しき死	九五	つ			
銭湯に	六二	立たせたき	一三四	妻に病まれ	九三		
石仏を	六一	立ちたくて	四五	土の中	五一		
そ		旅先の	七七	梅雨荒し	九八		
掃苔の	六一	旅に出て	三二	梅雨明けの	一一四		
その人を	一一七	竜飛岬	九七	吊皮は	一二九		

釣針を	.....	九一	通り抜け	.....	一一二	縫針を	.....	九〇
て	.....		十年経て	.....	四二	ね	.....	
灯竿と	.....	一三三	童貞さん	.....	一四六	猫抱いて	.....	六八
手に足に	.....	一二七	友来たる	.....	四八	猫憎くし	.....	六
手にのせた	.....	九四	陶枕に	.....	一五〇	猫柳	.....	七七
テレビ見る	.....	三四	当選を	.....	一四〇	は	.....	
天国に	.....	一八	な	.....			.....	
天使と同じ	.....	四三	なお会わず	.....	一〇七	墓があり	.....	五一
天井が	.....	一〇二	汝が祈り	.....	四三	吐く息も	.....	七六
点滴の	.....	八八	長靴の	.....	九	白昼夢	.....	一四八
てんと虫	.....	六二	骸と	.....	七一	斜に見て	.....	一〇〇
と	.....		中之島	.....	二七	蓮の花は	.....	一九
童顔は	.....	三五	夏雲の	.....	三七	初盆の	.....	三
同期の桜	.....	三五	何もかも	.....	二八	初夢も	.....	四四
灯台と	.....	六三	波のしぶき	.....	一五	鼻先を	.....	一二
灯台は	.....	一五	南天の	.....	四九	花の墓	.....	六四
灯台よ	.....	一三五	に	.....		母と来て	.....	三八
遠き火の	.....	一〇〇	虹の輪に	.....	六五	ハラキリ由紀夫	.....	一〇八
塔の朱の	.....	一三四	入院や	.....	一〇二	榛名富士	.....	八五
灯籠三千	.....	五二	人情の	.....	二六	半月の	.....	一二三







## あ　と　が　き

藤沢桓夫先生に題字のご揮毫を頂戴することが出来て、私の終生の光榮と存じます。中島生々庵主幹のご懇篤なる序文とまども、心からあつくお礼申し上げます。

この句集は、麻生路郎先生の死去以後の八年間の句から四百五十句を集録したものです。先生の生前には絶えず選を仰いでいて、例えば、大きな壁にテニスのボールを打ちつけては反応を得るように、川柳という底知れぬものを納得し、理解しようと修練を積んで来たのであります。その壁がなくなつて、いよいよ一人立ちの時代に入ったのです。壁がなくなつたのですから、ボールを自由奔放に何処へなりと飛ばすことが出来た筈ですが、私には目に見えぬ壁が感じられて、従前と同じ気持で、ある時は、先生の生前よりも一層着実温微なる作句態度を持ち続けて来ました。短詩文学の世界にも、厳しい「忍の精神」が存在することを、懐疑しながら頷きながら進んで来たと言えます。それ故、第三句集と云えば、起承転結の転、ホップ、ステップ、ジャンプの大飛躍の収獲が望まれるものなのです。この「肉眼」は、私の目にも「檸檬」の延長にすぎぬものと思われ、その意味では不本意な句集となりました。

昨年初冬、生活の転機を持ったこととて、この際一冊にまとめてみたわけです。

前二回に引き続き今回も写真を担当して下さった山本邦氏、並びに、句の集録、校正などのお世話を願った窪田久美子、板尾岳人両氏に深甚の謝意を表します。

昭和四十八年六月十八日

橘 高 薫 風

---

著 者 印

---

川柳句集「肉眼」奥付・定価一千円  
・発行日・昭和四十八年十一月三日  
・著者・橘高薫風・発行所・大阪市  
南区鰻谷仲之町二十番地・川柳塔社